

除は穩便に行われ、戦争犯罪人もあまり出なかったようですが、フランスの民間人を切った容疑者の下士官が、南部へ連れて行かれ、シンガポールで裁判になったという話を後に聞きました。

仏印、マレー炎熱下

重労働・飢餓克服

長野県 唐澤 甲子雄

私は大正十三（一九二四）年長野県に生まれました。軍歴を申し上げますと、昭和十八年春、歩兵第五十連隊留守隊入営。七月、本隊第二十一師団歩兵第六十二連隊駐屯地仏領インドシナハノイ北方ヴァンエンに到着しました。

昭和十九（一九四四）年下士官志願、十月任官。戦局悪化の中、幹部候補生、下士官候補生、マレー人兵補志願兵の教育助教。シンガポール決戦準備、対潜水艦監視哨長。その間三度命拾いをし終戦となりまし

た。昭和二十一年五月田辺上陸復員しました。

私は男兄弟七人の三男で、兄貴は国策に従い満州へ行っていました。次兄は私が帰って来たら戦死していたのですが、海軍へ行っていました。私の場合もやはり大陸へという勇ましい気持ちも大分あった訳ですが、どうしても母に泣き付かれて「お前さん一人ぐらいは近くにいって欲しい」ということで、東京の軍需工場に行ったのですが、たまたま一年足らずで、すぐ帰れという電報を貰い、夜学の本など半分揃えた段階で、一切を諦めて家へ帰って来ました。そして這いつくばいながら田の草取りをやっている親父の手伝いをしているうちに「徴用令書」というはがき一枚が飛び込んできました。

伊那町で身体検査をやるから出て来いということ、兵隊検査と同じように裸にされました。背中をポンポンと叩かれて「合格」となりました。その時に私は今頼まなければどうしようもないぞと、大きな声で「お願いがございませう。私にはまだ下に弟三人がおり

ます。そして上の二人兄と次の弟は軍籍がございません。なんとしても一年待っていたきたい」というお願いをしたのです。その折に「この非常時に泣き言をいう男がいるよ」と言われ、その間にも次々にみんなの肩を叩いて「合格、合格」とやっています。それでも「まあ一年待つてやる。来年の今月の今日だぞ」と言われまして意気揚々と家に帰ってきましたところが、父親は飯を食っている箸をポロリと落としまして「もうお前の将来は終わりだ。どこへ行っても手帳に亦い字で書かれてもうおしまいだわ」と。

「弟が三人おります。次の弟が卒業するまで待つてください」という理屈の通ったお願いでしたけれども、父親は明けても暮れても同じ心配をしていますが「どうじゃ、いっちょう先手を打たんか」と、先手を打つということは一足早く軍隊へ行くということで、徴用令書で一年待つて貰って行くより、軍隊へ行ったかどうかという提案を親父の方からしてきたのです。私は「それでいいのか、それで家はやって行けるのか」。父親もこの大きな刺激でますます元気になった

というようなことで、「じゃあ、行くぞ」と現役志願をしたのです。それから近所で「兄ちゃん、兄ちゃん」と慕っていた方々が戦死している。このため反面「この仇を取らないかん」という勇ましい気持ちもあつたのです。

松本の歩兵第十五連隊へ入って、中隊でも一番若いということでも明けても暮れても班長室へ呼ばれ、「卜十官候補として志願せよ」「いや私はとてもそういう頭でもございませぬ」ということでしたが、結局は班長の言うことに従って下士官候補に応じました。そして仏印（現ベトナム）のハノイの北に兵舎がありました。そこで、そこからマレーまで列車で三十一日かかって首都のクアラルンプールの近くのコートデクソンにあった学校に行きました。

そして候補生になって間もなく、自分の隊長が週番司令の時に止まって敬礼したら、四国の人で「お前、どこへ行ってきたか」「はい、酒保へ行ってきました」「何ぞあつたかいな」「はい、沢山ありました」「何と何と何を食べてきたのか」「バナナ三本とコーヒー二

杯、大福を三つと……」と食べ物全部を正直に言ったのです。軍隊の学校では、毎日曜日に精神訓話があります。「第4区隊の唐澤甲子雄という男は、これだけ食ったそうだ」と私の報告したものをよく覚えていて話されます。要するに軍隊の飯以外にこれだけ食ったら身が持ちっこないということなのですが、そういうことを日曜日毎に三回ぐらいやられて、そして私の身体はみるみるうちに太っていったのです。たまたま名前を先に覚えられたということで、いつも隊長のところへ呼ばれ、親の話などをしておりますうちに「お前、ちょっと太ったな」ということから「何ぼ太った」「入営してから約一〇キロ太っておりますようか」と言ったら驚きまして、今日の日曜日の精神訓話には「何ぼ食ってもいいけれども、第四区隊の唐澤のように太れ」というような精神訓話に変わってきたようなことでした。

当時は戦いの緒戦の段階で、あちらこちらが平定したかみえた時期で一番平和な時期でした。そして今度は卒業と同時に「お前はここに残れ」という命令を

貰いました。ベトナムの原隊では、上伊那郡の箕輪町の有賀次男さんという人は、九月十五日まで終戦を知らずに三分の一が戦死したという大激戦を生き残ったというような状況でしたが、私はどうしても原隊に帰して貰えず、南方にとどまったのです。

それで間もなく私は第一回の死ぬか生きるかの瀬戸際に行き合ったのです。それはライバルのようにやってきた伊藤という人がたまたま入院一步手前の入室ということになりました。それで伊藤がさっぱり外へ出てこないといって、こちらはバナナを下げたり、いろいろの物を持ちたりして、一緒に食べて洗濯もしてやって、と伊藤の世話をやっておりますうちに腸チフスだということで陸軍病院へ入院となりました。これは大変だと思っておりますうちに今度は私も腸チフスに罹病しております。一週間四〇度前後の熱が続き、髪も三分の一ぐらいなくなりました。その間、私は熱に浮かされていながら何でもありませんけれども、下伊那出身の田中さんという看護婦さんが二昼夜寝ずに看病してくださったようで、そのお陰で無事に

生き残ったのです。

そして煙草の空き箱の裏に「この者は腸チフス全快者なり、今後四十年間腸関係伝染病の予防接種不要と認める」ということを書かれました。これによって私は戦後四種混合とかいろいろな予防接種はしたことがありません。そんなことで、今度は私も教育隊を去ることができなくて、最初に迎えたのは幹部候補生の方々でした。

ジャワの士官学校が危なくてやってゆかれないというところで、ジャワ士官学校マレー分校という形でやったのですから、下士官候補としてあがってきた私が、卒業すれば軍刀を下げるという幹部候補生の授業をするということで、教えてみても無理に決まっています。それでもどうにか勤めを果たしておりました。

そのころから軍の食事も細くなりました。南方軍軍司令官は寺内寿一元帥でよその国と仲良くということを中心に考えなければ絶対だめだという強い教えでした。

戦況はますます悪化しまして、私どもの学校でも夜

になりますと三方ぐらいから砲火が花火のように上がったたり、上空にはかすかに飛行機の爆音がするようになりました。

そのころ、マレー人の兵補という志願兵が入ってくるようになり、その人たちの教育も兼ねてやるようになったのです。たまたま下士官候補生の使った銃を今度は兵補に貸してやって、歩哨教育などをやったのですが、「誰か！ 誰か！」と言ひ、三つで返事をしなかつたらボンと撃つというので、それには早く「誰か！」の日本語を覚える必要があります。ある時それを早くやられたものですから、それに対応しないうちにはズドンとやられました、たまたま紙の空砲が入っていたということでしたが、これが原因でこの眉毛の幅がちよっと広いのです。実弾だったら即死でした。

これは激戦とは関係のない、一見平和に見えるような場所での生死紙一重の体験をした訳です。

戦況はいよいよ切迫してまいりまして、現地人、外国人の雇人は帰してやるようにとのことで、私の部屋で世話になっていた太郎と呼んでいた坊やにも、軍隊

の靴下に目いっぱい詰めた米、片方の靴下で二升入り
ますから、それを両方の靴下で四升、ほかに新しい襪
や敷布で作ったランニングシャツなどを全部持たせ
て、帰るのを嫌がるのを帰しました。「日本へ着いて
行く」というのですが「絶対だめだ」と帰しました。

何故そんなに好かれたかといえますと、イギリス、
フランスとか欧米の方々はボーイに対しては部屋で食
事が済むまでは一時間でも二時間でも待たせておくとい
う習慣です。それはマレーでもインドネシアでも植
民地でしたので、そんな習慣があったのです。それで
「ちょっとどんな飯を食っておったのか」と持つてこ
させますと、お皿を幾つも持つてきまして、それを全
部ひとつの皿に集めて、これを手で食べるといふ具合
でした。「俺の飯と交換しよう」と、こんなことは絶
対言うことをきかなかったのですが、最後には折れま
して、「日本の習慣はこうだ、同じ顔色しているお前
さんたちがそばで二時間も二時間も待っていたら食ら
うものも食えないわい」というようなことを言いました
意思疎通したというようなことでした。

いよいよそのころから危ないぞと、そしてシンガ
ポールの方へ移動するようなことになるだろうと思っ
ておりますうちに、重い荷物は全部船に載せろとい
うことになり、その船内監視を命ずるといふ命令が私に
出たのです。ところが同じ下士官室にいました岡山県
出身の方は、結婚してから子供を置いて出征したとい
うことで、お母さんが子供さん二人を抱いた写真を見
ては涙を流しておったのです。その方が今度はひどい
脚気の症状になりました。そしてマレーからジョホー
ルバル、いわゆるクアラランブル手前のオートリク
ソンというところからジョホールバルまで歩きますと
五〇〇キロぐらいありますが、彼はそれを歩いて行く
ことになりました。その方は「五〇〇キロ歩くなん
で、どうしても駄目だ。お前さんはいいな」と言いま
す。そこで「私は歩くのは何でもないので、命令さえ
変わればいつでも交替しますよ」という話をしました
ところが、早速言ってくるということでした。しかし
そこで出た命令は、今度は私が近くの小山に上って対
潜水艦監視哨長という役目を貰って七人で勤務交替す

ることになったのです。

しかし彼の乗ったその船は、出航するかしないかのうちにボーンと大きな波の柱が立ちまして立ち所に沈んでしまったのです。その時、私がちょっと意地張って「命令ですから」ということでその船に乗っていたとしたら、私が死んでいたのですが、その班長は極めて気の毒でして、私は今でも彼の家族が写った写真を見て涙を流していたことが眼前にちらついています。

いよいよジョホールバルに着き、クルマンという街に連れて行かれ、ここで終戦になりましたが、イギリスの部隊はさっぱり上陸してきません。最初に来たのはイギリス軍に使われているインド軍の兵隊さんで、最高指揮官は直角の計り方も知らないような下士官でした。

最初にシンガポールの全部の軍施設を申し送れという任務を貰いました。この階には机が幾つ、何は幾つという具合にやりますと一つの施設で相当量の書類が必要で、これをパッパッと見もしないでOK、次OK、次というような形でやったものですから最低二〇

日かかるだろうと思われた申し送りがたったの一週間で済みました。

次は飛行場の周りに大きな穴を掘って、そして十字鍬の柄を抜いて、これだけの穴を掘れという労働です。背の高い人も低い人も平均にきれいに掘れる訳です。しかし四〇度という炎天下の作業でした。出来たらその中に幕舎を作れということで、何百ありましたか、五〇〇や七〇〇ではきかないくらいです。そしてこの通りは黒の天幕、この通りは茶色の天幕を、そして後の通りは真っ白い天幕をとのことです。聞きましたら黒い天幕には戦争犯罪人であると最初から決まった人を入れ、その次はどっちかという、場合によっては白だけれども分からない人を入れるということで、将校さんたちは大分心配していたのです。ちょっと文句を言ったりして茶幕へ入れられたら大変なことになると用心して、憶病になっていたのです。

食事は湯飲みに半分〜七分目くらいの米しか配給になりません。どうにもこれでは生活できず、しかも炎天下で長い間作業をやらされたということで、その間

に死亡した人も出ていました。そして内緒で手榴弾も希望者には配られました。これでは簡単に死ねるわけです。これで昔「生きて恥ずかしめを受けるなかれ」というようなことが言われましたが、ゴム園では三回ほどこの手榴弾の爆発の音がしたようでした。

そしてこんなことをしていたら駄目だということ、青葉班、虫取り班を作り、虫取り班は細いつるで管を作りまして、こっちは青い虫、こっちは毛虫と分けました。毛虫は大きな鉄板で炒めますと大きな鱈一匹ぐらいの大きさになります。青い虫にはゴマに止まっているゴマ虫を二つ寄せたような大きな虫もおりまして、それを採ってきて、この青虫はなるべく生で食えることを基本に、それが嫌な人はもう死んでもいい、という意思表示ということにしました。

重労働に就いた人たちは何でも食べ物を食べないと自分たちは死んでしまうという頭がありますので、全部食べたということです。ところが指揮官のお偉い人たちは皆「ムシは食わねど高楊子、信州の蛇食う男」という形で冷やかされたものです。

こんなことが続きまして、そしてどうしてもこれも足らんというときに、たまたまクリスマスの夜の直前のイギリスの兵隊が入って来まして、最高幹部たちが一堂に集まってクリスマスが盛大に行われました。

この機会を逃しては駄目だということで、若手の向こう見ずたちが、何としても英軍に交渉しなければ我々は自滅するというようなことになりましたが、さて誰が行くとなると「一番若いのが行かにか」ということで私ほか五人で行ったのです。

トムリンソン大佐といまして、日本にも十五年いたという人で、日本語もペラペラで、ただしビルマ作戦で片腕を手榴弾で焼かれており、怨み骨髄ということで、この人との交渉では相当の覚悟が必要だとのことで、まず、小学校のころイギリスは紳士の国であると習いましたけれども、その通りでしょうかと最初に聞いてみました。山高帽でステッキをついている姿をジェスチャーでやっただけところが機嫌よくなりました。「その通りだ」「それなら今日本は負けました。勿論死ぬ覚悟で来ておりますので殺されても覚悟はできてお

ります。殺すつもりでしょうか、それとも生かすこともお考えでしょうか」ということを言いました。するとレーションという弁当がどっさり配給になりました。

そんなことから、これはもう食糧でうんとサービスしておいて、全員の生命を取る前ぶれだという噂などが飛びました。私が一度帰りましたボーイが村の村長らしき人を連れて来て、「是非私の村へ来い、嫁さんには私の姉さんを紹介する」というようなことで、大分心が動いた時もありました。そんなある日、ゴム園の中を自動車からマイクで「私は○○の宮でございます。日本軍人諸君に告ぐ！ たまたま巷ではいろいろの噂が飛んでいるけれども、国と国との約束で必ず君たちは内地へ帰れる。親、兄弟、友人、内地の人たちの顔を思い出してみなさい。必ず帰れるからどんなことがあっても辛抱しなさい」というような放送をしながら通って行ったのです。そのようなことから私も、マレー人になろうという気は途切れまして、日本に帰る気持ちになりました。

そんなころ天幕にはさよならしてレンパン島という島へ渡るということになりました。この島は食糧は非常に少ない島で、聞くところによりますと、ドイツの負けた第一次世界大戦の時に捕虜が沢山追い詰められて自活の道を知らずに多くの人が死んでいったという言い伝えがある島です。その島へ「よし行こう、日本人の偉さを見せつけてやろう」ということで、万年筆、時計等を物々交換でさつま芋の蔓、タピオカ（ダリアのようなイモがつく。これはさつま芋、馬鈴薯以上のでんぷんが取れる）、茄子の種などに替えました。そして私たちは後始末をし、小さい船に乗せられてレンパン島へ移ったのです。

毎日毎日何回となくスコールが来る中で、みな自分の身体はびしょ濡れで、真ん中に穴を開けた携帯天幕を四人で持って、鍋、飯盒などあらゆる容器に雨水を溜めました。そして開墾しながらそこにおりました。さつま芋が一齐に沢山出来たというのですが、その時分に猿の集団が来まして引き抜いて大きな芋だけ食べちゃって、箸の太さのような芋だけ残し、蔓と葉を

人間様が有り難く頂戴する、こんなことになりました。それで缶詰の空き缶に石を入れて、それで一方の紐を引くとガラガラと音がするようしかけます。最初のうちは猿も逃げて行きましたけれども、しまいにはその音がするころを狙って猿が来るという苦い経験もございました。

たまたま野菜も沢山出来、そして漸次生活もどうか楽になるぞと思っていた矢先、「内地へ帰れる日が近くなったぞ」と、リバティー船の第七梯団にはどここの部隊と言われ、ちよつとも私の部隊の名前が載ってこないと思っていたところが、この機会に隊長を海に投げ込めという不穏なことを言う部隊もあるようで、私の教育隊の関係の者は分散をして病院の班ごと治安維持の役割を果たすようにとのことで、私どもは小集団に分かれて各梯団へ分散して乗って、無事に和歌山県の田辺港へ還ることができました。

そして第一番には襟を開けられDDTを後ろから横から、いわゆる虱がうようよしているのを一ころにし、身体検査を受けて、五月二十七日に「復員してよ

ろしい」ということで還ってきたということです。

そして私は部落の区長になった時は、誰も私のことを忘れていてくれればいいなと思っていたところが、私の名の「甲子」という神様を「甲子様（きのえさま）」と言っておりますけれども、六〇年に「必ずつ建て直す」という行事がありまして、「区長、来年はこれを建て替える年だぞ、今年から準備せよ」との意見が出ました。弱ってしましまして、同級生の女の方々に訴えましたところが「そんなこと、いくらでも応援してやる」と二〇人も寄ってくれまして、無事にその「甲子の神様」を建て直すことができました。

けれどもやはり今も戦争の後遺症というのがありまして、部落に同級生がたくさんいる方と比べますと、いつも寂しい思いをしなければならず、これは死ぬまで続くと思います。

もう一つは私どもはこういふ体験を何故率直に子供達に伝えられなかったのかと思います。恐らく私ばかりでない、伝えられなかったか、負けて還ったのだと

言う意識がどうしても先にたちますと、堂々と戦争の話ができなかったと、だからやはり若干そのようなしわ寄せが現在世の中にも出ていやしないかという感じもいたしております。